

# “The Snows of Kilimanjaro”の一考察

— Harry の死について — (1)

山 口 和 世

## I はじめに—Harry の死をめぐる二つの解釈について

Hemingway ほど「死」について書き続けた作家は稀である。彼の代表的短篇の一つである“The Snow of Kilimanjaro”においてもその基本的、かつ究極的な主題は「死」にほかならない。しかし、その主人公、Harry の死をめぐる全く対立する解釈が生じている。すなわち一方は Harry の死を「救い」であると考え<sup>(1)</sup>、他方はこの考えを排斥する<sup>(2)</sup>。

それでは主題についてのこうした対極的な解釈はどうして生まれるのであろうか。その一つの原因は Hemingway 自身の‘iceberg’<sup>(3)</sup> 説に、そして、他の原因は Malcolm Cowley の卓抜した指摘に求められるであろう。従来、Hemingway はアメリカ・リアリズムの系譜に属する作家であると見なされていた。ところが、Cowley によれば、Hemingway は Poe, Hawthorne, Melville といったシンボリズムの傾向が強い作家と近い関係にあるといわれている<sup>(4)</sup>。余分なものの削除、説明の忌避、そして極力単純化した形での事物の提示という手法によって、深い暗示性と多様な含蓄を生み出すのが Hemingway の特徴である。Hemingway の作品の象徴性を探る批評の旗手とも言うべき Carlos Baker が *A Farewell to Arms* の解釈に際して用いた分析の手法が“The Snows of Kilimanjaro”に適用された結果、この作品におけるイメージに対して様々な解釈が施され、更にそうしたイメージが二つの範疇に分類され、結果としては主人公の死を「救い」ととらえる側と、「救い」を否定する側に二分されることになったと考えられる。たとえば、この作品における最も重要なイメージの一つである‘the snow’あるいは‘the snow-covered mountain’を「完全」や「純潔」の象徴とする肯定的な価値を与える批評家の多くは、これらのイメージが‘cold’, ‘leopard’ とともに一つのイメージ群を形成し、もう一つのイメージ群である‘the plain’—‘heat’—‘hyena’ と対立すると考える。彼らによれば Harry はその死において認識に到達するのである。反対に‘the snow’, ‘the snow-covered mountain’が「死」を表現するものであるとして否定的な見方をする批評家は、Harry の死に意義を与えない。いずれにしても、“The Snows of Kilimanjaro”をめぐる解釈に見られる対極化、二分化といった現象はイメージこそが作品の本質的な意味を伝えると考え、イメージに過度の重荷を負わせるところから端を発している。しかも、そういう解釈においてはイメージの扱い方が静止的であり、単眼的、単旋律的である。そして、時として Carlos

Baker の *A Farewell to Arms* の解釈に見られるように、主要なイメージに基盤を置いて原理的なものとして最初に確立した自己の理論が作品に先行し、実際に作品に書かれている事に反する解釈をしたり、<sup>(5)</sup> イメージをある一方の方向にのみ引き寄せて意味を持たせようとする反面、自己の理論の尺度に合わないイメージ、その他の作品構成要素を捨象してしまうという欠点が生じる。

そこで、私たち読者にとって必要な事は、Hemingway によって最大限の簡潔性をもって提示されたあらゆる事物の奥行、そして、その複雑な陰影の意味と背景を作品に即して考えることによって、“The Snows of Kilimanjaro” の主人公 Harry の死を解釈することであるとされる。

## II Harry と Helen

この作品に登場する夥しい人物（Harry の回想に現れる人物も含む）は、いずれも相対立する両面性を具有しているという点において共通している。

Harry は Helen の目からは彼女が知っている中で ‘the most complete man’ として眺められる。しかし Harry 自身が認識し、私たち読者が受け取る彼の像は作家として不毛の生活しかできず、肉体的にも倫理的にも墮落してしまった人物である。‘to survive and get ... work down’<sup>(6)</sup> という願望と、現実の姿の間に著しい差異が見られる人物に他ならない。Hemingway はカタログ式方法という伝統的な方法、すなわち、‘a portrait, with background, complete’<sup>(7)</sup> を描くという方法を棄てて、実に単純に人物を描く。Harry の描写方法もその例にもれず、私たちが Harry の外見について知るのは、右脚が壞疽にかかって寝台に横になっているという事だけである。脚に傷を負った人物は Odysseus, Achilles, Oedipus<sup>(8)</sup> の例に見られるように、古典的伝統を持った英雄像である。従って、Harry もまたこれら三人の英雄に匹敵する高貴な特質を有し、崇高な行動を行ない得るという期待を私たち読者は持つのである。しかし、狩猟の拠点として選んだ快適なキャンプ地であって Harry は終始寝台に横たわった姿勢のままである。Hemingway が「人間の自発的で英雄的な死との対決という古典的な行動の復活を見た」<sup>(9)</sup> 猛獣狩を Harry は断念せざるを得ない。しかも、少しの不注意から生じたこの傷のために Harry は死に直面することになる。そして、Harry がいるキャンプ地の周囲には彼の死を待つかのように腐肉を漁るハイエナと秃鷹が出没し、熱気に包まれた平原が続く。壞疽という肉体上の腐敗は精神的な腐敗を意味するとさえ考えられる。英雄となる一資格を示す脚の傷は Harry をしてむしろ伝統的英雄に反する人物たらしめていると言えよう。Santiago や Jordan の傷つきながらも敢然と戦う姿は Harry には見出すことができない。私たちの前にある Harry の像には肯定的要素と否定的要素が同時に同等の強度で、あるいは後者が前者を凌ぐ勢力となって存在しているのである。

以上は Harry を静態的に見た場合である。次に彼を動態的に考えてみよう。死を招く壞疽

にかかったのは、

a thorn had scratched his knee as they moved forward trying to photograph a herd of waterbuck . . . They had bolted, too, before he got the picture.

という次第である。この Herry の行動の底に見られるのは、予期—失敗、意図せざる結果というパターン、単純化すれば、プラス（肯定）—マイナス（否定）のパターンである。

Africa was where he had been happiest in the good time of his life, so he had come out here to start again . . . he had thought he could get back into training that way . . . And he had felt the illusion of returning strength of will to work. Now if this was how it ended, and he knew it was . . .

「考えた」事が全く逆の形で「事実」となってしまったことを彼は「知る」のである。‘It [a talent] was never what he had done, but always what he could do’ というバリでの生活が再起の夢を託してやって来たアフリカにおいても繰り返される。Harry の期待は現実には望ましくない事実、結果に変っている。この作品において ‘now’ という語の反復が顕著に見られるが、特に期待に反した動かし難い事実、あるいはその事実と関連している事柄の描写とともに現われるのである。順に拾ってみると、“Now is it sight or is it scent that brings them like that?” “I watched the way they sailed very carefully at first in case I ever wanted to use them in a story. That’s funny now.” “I’m dying now.” を始めとして四十回も現われる。

独白の部分から採った二つの代表例に見られる予期—失敗、意図に反する結果（プラス—マイナス）の変化のパターンは、現実及び独白の間へ挿入された回想場面における Harry の行動をも貫通している。プラスの範疇へは、本来的な姿、連帯、助力など積極的価値を持つ観念を、マイナスの方へは本来的な姿に反する事実、拒絶、裏切など消極的価値を持つ観念を含める事ができよう。このパターンは更に四種類の下位パターンに分類される。(一)プラス→マイナスという単純な経過をとる場合——ギリシャ・トルコ戦争の際の思い出：‘he sent them on into it [the snow] when he evolved exchange of populations. And it was snow they tramped along in until they died the winter.’ に見られるもので、味方としての助力行為が実を結ばず、裏目の結果に終る。(二)対立関係にある行為が同時に存在する場合——バリの思い出：‘And in that poverty . . . he had written the start of all he was to do.’ (三)マイナスがプラスに転化したような外見を示すが、それが更に大きなマイナスに転化したり、マイナスを意味する場合：‘he thought of all the time in his life he had spent gambling. But he had never written a line of that. . . .’ となると前半のマイナス行為が小説の素

材になるというプラスの意味を持つに至る。しかし、再び 'but' 以下の マイナスの結果へと転化する。創作行為に関する事柄はこのパターンを底流に持って、"The Snows of Kili-manjaro" に絶えず繰り返して現われる。また戦闘行為の回想：'That was the way he'd first seen dead men... Later he had seen the things that he could never think of and later still he had seen much worse... he could not talk about it or stand to have it mentioned.' において、前に位置する各々の行為は マイナスの行為であるが、その後に位置する行為は前の行為よりも更にマイナスの度合を強めているため、前の行為は後の文との関係からすればプラスの様相を帯びる。(四) 一見プラスの姿をとって現われる事の裏にマイナスが隠されている場合：'He remembered the good times with them [women].' 'good times' とは実際には創作活動をしないう快楽的な生活に他ならない。回想における Harry の行動はすべてこの四種類のパターンのいずれかに該当する。彼の過去も現在もプラスーマイナスのダイナミックスの上に立っていると言えよう。否定と肯定とのまじりあい、否定のなかに肯定を見、肯定のなかに否定を見る態度こそ Hemingway 思想の語り難さ、不明瞭さである。<sup>(10)</sup>

Harry の妻、Helen はどうか。彼女はある角度から眺めると確かに Catherine 以来の純粋な魂の象徴としてとらえる事が可能である。彼女は精神的にも肉体的にもすばらしい女で、Harry を過去の誰よりも愛し、彼の快復を願って献身的な努力をする。しかし、それにもかかわらず彼女は Harry に愛されていない。Helen の希望や助力の言葉は Harry の絶望的な言葉によってしか答えられない。私たちが初めて接する Harry と Helen の間にある次元の差は Helen の側からすれば、協力が期待に反した結果に終ることを意味し、作家としての Harry の立場に立つ場合、Helen のプラスの側面は全く逆のマイナス的な色彩を持つてくることを物語る。Harry は Helen を 'this good, this rich bitch, this kindly caretaker and destroyer of his talent' であると考え。Helen には積極的価値と消極的価値が 'and' で結ばれて同時に等価的に存在しているのであり、前者が強調されると後者もまたそれに劣らず前面に出てくる。Helen と Harry は授与者または補佐者 — 被授与者または被補佐者という関係を持つ一方、敵対者どうしという関係をも持っている。従って、'It's bad for me... This knowledge that you're going mad for me' と思われる。Helen が Harry の体力をつけるためにスープを作る行為、あるいは彼女の言動に見られる希望の言葉は、Harry が捨てる必要がある無為で頹廢的な享樂生活の継続を意味するものでしかない。にもかかわらず、Helen も「今は」アフリカに来ている。'he just got it [the broth] down without gagging' というのが現実である。彼女の協力、献身は現実には真の意味で作家としての Harry の役には立たないのであり、彼は無意識的に拒否反応をおこす。しかも、'I'm only a middle-aged woman who loves you and wants to do what you want to do' と言う Helen ではあるが、Harry の創作行為に対しては協力しない。'“You can't take dictation, can you?”'

という Harry の間に対する Helen の答えは “I never learned” だけで終りである。「欲する」、「伝達する」は存在するが、「応じる」は二者の間に見当らない。そこで Harry の自嘲, “Love is a dunghill” “Your damned money was my armour. My Swift and my Armour” が生まれる。彼は女が金持ちであるためにその金で生活してきた。すなわち, Harry にとって生物的生命を守るという意味では Helen は ‘armour’ であった。しかし, 作家生命を守る ‘armour’ にはならなかった。むしろ, 作家生命を殺してしまったという点で Helen の行為は Hercules の下着の役割を果たしたと言えよう。現実においては ‘armour’ の本来の意味は失われ, 缶詰成金の名前になり下ってしまう。‘love’ からもその本来の純粋な響きや, 現実の時間とは別の独自の体系を持ち, 且つ, 生が燃焼される意味ある時間は消え, それは排泄物という極めて不潔で日常的なものに等しくなる。

Helen との生活は Harry にとってまさしく作家としての死以外のなにものでもない。この短篇の中心点は ‘the corrupt power of woman and money’ にあると指摘される<sup>(11)</sup>ほど Helen は強い否定的側面を持っている。Harry によって排泄物のイメージで表現される関係にある Helen は常に死と結びついている。Harry が自己の死を意識するのは, Helen が現われた時, あるいは, Helen の優れた点についての描写の直後であり, 反対に死が遠ざかったと考えるのは, ‘When she goes... I’ll have all I want’ と思う時である。Harry にとっては意識の中で「書いている」小説である回想, あるいは, これまでの自身の生活に対する反省を含む独白から彼を現実の世界へ引き戻すのは Helen の撃つ銃声であり, 彼女自身の姿や声である。創作行為がクロノス的な現実の時間の支配を逃れてカイロスの時間を樹立しようとする行為であるとすれば, 退屈で同じ事を繰り返す女とその仲間の金持ちはまさにクロノス的な存在である。Harry の作家仲間の Julian は金持ちに対して ‘romantic awe’ を抱いていた。

He thought they were a special glamorous race and when he found they weren’t it wrecked him just as much as any other thing that wrecked him.

Helen から Harry への助力は拒否されたり, 実を結ばなかったりして, 常に彼女の意図に反した結果に終る。一方, Julian や Harry の側から金持ち連中に対する期待は, 金持ちの現実の姿を知ることによって, あるいは, 金持ち連中のことを小説に書こうと思いつつその生活態度に自分も埋没してしまうことによって否定される。Helen は ‘death-in-life’ を意味する<sup>(12)</sup>と考える解釈が生じる所以である。

### Ⅲ 回 想

出来事に内在する対立項に注目しながら, Harry の五つの回想を見ることにしよう。第一回想の中で Nansen の秘書と老人, 女達の間において雪をめぐる一見何の意味もない話が

やりとりされる。(一) ブルガリアの山に積もった雪を見て Nansen の秘書は「雪のようだ」と老人に聞く。(二) それに対して老人は「時期が早すぎる」という理由で否定する。(三) 秘書は女達に雪ではないと伝える。(四) すると、女達は自分達の「見誤りで雪ではない」と述べる。(五) しかし、実際には雪であった。(一) と (二) の間には見込み違いによる予見とその反対、(二) と (三) の間には習慣から生じる固定化した観念による予見とその反対の事実、(四) と (五) の間には伝聞とその反対の事実が存在し、更に (一) は (二) (三) (四) と、(二) (三) (四) は (五) と対立関係をなす。予見—反対の事実というパターンを基礎とする対立項目が種々の水準で存在し、並列、連鎖、対応の関係を形成している。既に触れた第一回想における Harry の指揮による住民交換とその結果おきた雪の中での全住民の死滅という出来事 (Harry の企て—予期に反した結果) もこのパターンの中に組み入れる事が可能である。更に、(一) から (五) は一つの群を作り、住民交換の事件と対立関係に立つ。(一) から (五) は単独には特別の意味を持たない。しかし、交換された住民の雪の中での凍死事件が続くことによって、事件に関係のない人間の間で交されたなにげない会話が一転して恐しい意味を帯びてくる。雪を日常の挨拶の一つくらいに考えている人間がいる一方で、まさにその雪によって死んでいく人間がいるのである。第一回想の最初の事件の奥行に潜んでいるこのパターンが、続く四つの回想、そしてこの作品全体を貫いていると言えよう。第一回想において注目を要するもう一つの事は、この回想の外枠あるいは背景を作っている存在である。すなわちそれは(一)から(五)、及び住民交換の出来事の共通項となっている「雪」である。「雪」を純潔なものと考える伝統的、潜在的な固定観念<sup>(13)</sup>は住民交換の結果に象徴される現実の世界では破滅してしまっている。第一回想の最初の部分に見られるパターンとそのパターンの意味を深める外枠は後の回想に至るほど確固とした姿をとる。その結果、プラス—マイナス両項の相互牽引力は漸層的に緊迫感を高め、時として不条理、悲哀、愚かしさの傾向を持つことがある。

第一回想に示された諸要素——プラス—マイナスのパターン、そのパターン全体と対立関係をなすことによってそのパターンを強化する役割を果す並列事項、更にそれらの背後にある伝統的、本来的観念——を各回想の中に拾ってみると次のようになる。

第一回想を構成するシュルンツ、マドレーネル小屋、フォルンベルクとアルルベルクでの出来事に共通するのは「雪のクリスマス」であり、これが失なわれた伝統的観念となっている。クリスマスはここでは血ぬられている。様々の事件の中で特に Harry と同じ軍隊に所属する Barker の非戦時における卑劣な行為はクリスマスの観念を完全に破壊する。彼はクリスマス休暇をとったオーストリア軍将校の列車を前線を越えて爆撃する。シュルンツの雪は目を痛めるほど輝かしいが、川沿いの道では雪は小便で黄色く汚されている。マドレーネル小屋では吹雪となり、人々を閉じ込め、Lent 氏は一週間も続いた賭事のためスキー教授の収入も元手も全て失ってしまう。スキー大滑降、贈り物を買ったこと、居酒屋での一時、平野の向こうにくっきりと見える山々がこうした事件と並列され、対照関係に置かれて、事件のプラス—マイ

ナスの図式を鮮明にする。

第二の回想の場はアナトリアとパリである。アナトリアでは第一回想における戦争の英雄像を根底から覆す Barker の行為が更に拡大された形で展開される。戦争の現実——戦闘について全く無知な将校、味方へ弾丸を撃ちこみ子供のような喚声をあげるイギリスの観戦武官、逃げるトルコ兵の中へ弾丸を向けて自分自身も逃げ去る将校達の描写は Harry とイギリス砲兵下級士官の詳細で生き生きとした喧嘩の描写と対照をなす。死と対決し、生を賭けた戦闘行為といった積極面の詳述は一切ない。更に、こうした戦争と同時平行して、パリのカフェでコーヒー皿を山と積んでダダイズムの話をしているアメリカ詩人の描写がある。戦争と関りのない詩人が話している内容は伝統的既成形式に対する極端な反抗と否定を特徴とするダダイズムの事である点が重要である。伝統的な戦争観の現実における崩壊と詩人の話題とは深い共通性で結ばれている。そして、詩人の話相手となっているダダイストのルーマニア詩人 Tristan Tzara は妻と和解したばかりであるにもかかわらず、女から彼に手紙が来たのを楔機としてお決まりの軌跡を辿る。そういう彼の私生活は 'the end of the beginning' という対立項によって圧縮表現されている。第二回想も対立項、並列項、破滅した伝統の諸要素が複雑に交差し合っている一つと言えよう。ここでは伝統的観念が滑稽なまでに破壊されている。Harry はパリからアナトリアへ移動する時、終日けし畑を通ったため感じが変になり、「遠近感がすっかり狂ってしまったような気がする。」これは戦場へ向かう途中の描写であるが、Harry がアメリカへ来る以前に大部分をすごしたパリでの生活と戦地での生活をつなぐ部分に位置している事、またパリで無意味な喧嘩をした翌日の出来事である事を考えあわせると、深い意味が読み取れる。プラス、マイナスの感覚の混乱と伝統的観念の崩壊が至る所で極端な姿で現われ、回復し難い病的な状態で満ちているのである。

三番目の回想は湖の近くの丘とパリ、特にコントルスカルプ広場での経験である。ここには戦争はない。丘の丸太小屋周辺と鱒釣りをするために借りた川へ至る道の清新で健康な描写に見られる素朴な喜びが事件の背景となっている。しかしこの背景も丸太小屋と煖炉の上に掛けてあった銃の焼失、小屋が再建された後も灰（しかもこの灰は洗濯用の灰汁の材料に使用される）の上に転がったままになって本来の用途に役立っていない銃の姿、皆にとって居心地が良く仲良しになれたホテルであったのに、多くの収入を得た翌年インフレのため経営できなくなり、首をつって自殺したホテル経営者の話によって無惨にうち消されてしまう。パリではコントルスカルプ広場界隈で貧困と不潔の中に住む住民に焦点が移される。彼らはパリコンミュン党員の子孫で、革命の夢が現実によって破れ果てた姿である。歴史上労働者を主体とする最初の政権として評価されるパリコンミュンもその内部的弱点と外部からの軍事攻勢によって僅か72日間で崩壊し、血の週間と白色テロルがその後に読いた。コンミュン党員の子孫は彼らの祖先が革命前に置かれていたのと同じ生活状態に戻ってしまったのである。ここにはもはや烈しい革命的エネルギーはない。彼らにとってはスポーツも酒も貧困を忘れ去るためのもの

でしかない。彼らの一人である酔っぱらいは、‘that typical French ivresse that you were propaganded to believe did not exist’ で叫びたり唸ったりする。労働者の願いである労働時間の短縮は現実にはかえって労働者の妻を困らせるような事態を生む。つまり、これまでは終業時刻が遅かったため、労働者は少ししか酒を飲まず、無駄使いもしなかったのに、八時間労働になった結果、毎晩酔っぱらい無一文になってしまう。

都市では十九世紀に人間社会の進歩の信仰に支えられた革命の夢が挫折したのと同じく、山では伝統的な牧歌の世界は消えうせてしまっている。山の牧場には piping shepherd and coy shepherdess の姿はない。愚鈍な少年は *As You Like It* の William と変らないとしても、雪が降り、外部からの残忍な侵入者がいる。乾草を盗もうとしてやってきた以前の苛酷な雇用主を少年は射殺し、盗人の老人の死体は凍り果て犬に食い荒される。少年は Harry が死体を町まで運ぶのを手伝う。ところが仲良しの Harry に手伝いの報酬を与えられるのではなく、期待に反して警官にひき渡される。この事件は春から秋にかけての爽やかな牧場の風景と並列される。

最後に Harry は擲弾兵 Williamson のことを思い出す。戦いについての Harry の回想はすべて戦争を雄々しい行為であるとする楽天的な伝統的見解とは全く逆の姿をした生々しい現実である。第二回想に現われるトルコ・ギリシャ戦争の事件はたとえ兵士や将校としてあるまじき不名誉な行動であったとしても、Williamson が遭遇した事件ほどの残酷さはない。勇敢で立派な将校であった Williamson はドイツ軍の手榴弾にあたって体がばらばらになってもなお生きていなければならぬ。友人の Harry にできる最善の助力は彼を殺して苦痛から救ってやること以外にない。「主は堪え難き事を人に課し給わず」などという教義は、Williamson が直面した現実には全く通用しない。回想では神への信頼、人間への信頼、社会的通念や伝統への信頼、事物への信頼のすべてが現実世界において裏切られている。Harry の回想は一つだけ単独にとりあげてみても Nick Adams の物語に等しく、更に深刻化した内容を持ってはいるが、時間的経過に沿って配列されておらず、無秩序な外見を示している。しかし、いずれの回想も、対照関係に立つ二つの対立項、それと並列されている一般に明るい内容を持つ事柄、そして失なわれた伝統的観念、以上三つを不変の柱として成立している。各々が互いに他のヴァリエーションとなっている回想が復唱されるような形をとっており、回想の配列を記号化するならば  $AX < A'Y \dots \dots < A''''Z$  と現わし得るであろう。回想の選択、順序はこの作品の背骨となっているパターンに従って細心の注意のもとになされているのである。物語にまで昇華されていない経験の断片が中心点も一貫した構造もなく寄せ集められているとか、あるいは、回想はそれぞれ分離独立している<sup>(14)</sup>と見なす事は不可能である。

#### 註

- (1) John Killinger, *Hemingway the Dead God: A Study in Existentialism* (1960, University of Kentucky Press), pp.30-31.



Oliver Evans, "The Snows of Kilimanjaro: A Revaluation", *P. M. L. A.*, 76 (December, 1961), pp. 604, 607.

Robert O. Stephens, "Hemingway's Riddle of Kilimanjaro: Idea and Image", *American Literature* 22 (March, 1960), p. 84.

Joseph Defalco, *The Hero in Hemingway's Short Stories* (1963, University of Pittsburgh Press), p. 210.

William B. Bache, "Nostromo and 'The Snows of Kilimanjaro'" *M. L. N.*, 72 (January, 1957), p. 34.

- (2) Caroline Gordon and Allen Tate, *The House of Fiction: An Anthology of the Short Story with Commentary* (New York, 1950), pp. 256-257.

Gennaro Santangelo, "The Dark Snows of Kilimanjaro", *The Short Stories of Ernest Hemingway: Critical Essays*, ed. Jackson J. Benson (Duke University Press, 1975), p. 251.

- (3) If a writer of prose knows enough about what he is writing about he may omit things that he knows and the readers, if the writer is writing truly enough, will have a feeling of those things as strongly as though the writer had stated them. The dignity of movement of an iceberg is due to only one-eighth of it being above water. (*Death in the Afternoon*)

- (4) "Nightmare and Ritual in Hemingway", *Hemingway: A Collection of Critical Essays*, ed. Robert P. Weeks (New Jersey, 1962), p. 40.

これは最初 The Introduction to *The Portable Hemingway*, ed Malcolm Cowley (New York, 1945) に記載されたものである。

- (5) Carlos Baker のこの傾向は E. M. Halliday, "Hemingway's Ambiguity; Symbolism and Irony", *Hemingway: A Collection of Critical Essays*, pp. 57-63. が簡潔にまとめている。

- (6) *Green Hills of Africa*

- (7) H. E. Bates, "Hemingway's Short Stories", *Hemingway and His Critics: An International Anthology*, ed. Carlos Baker (New York, 1961), p. 73.

- (8) Keiichi Harada, "The Marlin and the Shark: A Note on *The Old Man and the Sea*", *ibid.*, pp. 272-273.

DiMaggio の born spur が老人にとって持つ同様の意味を指摘。

- (9) R. B. ウェスト Jr. (著), 龍口直太郎, 大橋吉之輔 (訳) 「アメリカの短篇小説」, 20世紀アメリカ文学研究叢書 (評論社, 1964), pp. 97-98.

- (10) 谷口陸男, 『思想と方法』, 「ヘミングウェイ研究」, 志賀勝 (編), (英宝社, 1975), p. 36.

- (11) Carlos Baker, *Hemingway The Writer as an Artist* (Princeton University Press, 1956), p. 186.

- (12) Oliver Evans, p. 605.

- (13) E. M. Halliday, p. 59.

- (14) Gennaro Santangelo, pp. 255-256.